

令和 5 年 7 月 3 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13347

研究課題名（和文）20世紀初頭における歴史意識の転換と研究者ネットワーク 日本歴史地理学会を中心に

研究課題名（英文）The Shift in Historical Consciousness and the Historians' Network in the Early 20th Century:Focusing on The Association of Historical Geographers in Japan

研究代表者

廣木 尚（HIROKI, Takashi）

早稲田大学・歴史館・講師（任期付）

研究者番号：00756356

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀初頭に形成された全国的な歴史研究者ネットワークの実態とその活動が与えた影響を考察することを目的に実施された。本研究の主たる成果は以下の3点である。第一に、上のネットワーク形成の起源に「地方史学会」という地域の研究団体が大きな役割を果たしたことを解明した点。第二に、このネットワークが日本歴史地理学会を結集点として全国化する過程で、その構成員を研究者・教員層に特化させていったことを解明した点。第三に、各地の教員層を包含していたこのネットワークでは、歴史教育や現代史など、アカデミズム史学では扱われない地域や教育現場の要請に即した研究課題が積極的に取り組まれたことを解明した点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一に、従来、「中央」の学界を中心に考察されてきた日本の近代歴史学の形成過程に「地方」の歴史研究者が果たした役割を解明したことにある。加えて、その「地方」の歴史研究者の活動実態を解明することで、旧藩研究など地域史研究において近年盛んに取り組まれている研究課題と接続することができた。そして、地域アイデンティティに果たす歴史意識の役割、及びその形成と変容の過程を焦点化した本研究の成果は、各種の構造的問題を抱え、その持続のためには多様性と可変性を備えることが不可欠である現在の地域社会のあり方に、歴史学の知見を活かす方途を示唆している点で、極めて実践的な社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the actual state of the nationwide network of historians formed at the beginning of the 20th century and the impact of their activities.

The main results of this study are threefold. First, the study elucidated that a local research group called the "Local History Society" played a major role in the origins of the formation of the above network. Second, the study clarified that in the process of the network's nationalization with the Japanese Association of Historical Geographers as its rallying point, its members were specialized to researchers and teachers. Third, the network, which encompassed teachers from various regions, actively engaged in research projects such as history education and contemporary history that were not covered by academic historiography, but were in line with the needs of local communities and educational sites.

研究分野：日本近現代史

キーワード：史学史 日本歴史地理学会 歴史地理学 郷土史研究 地方史学会 歴史意識 旧藩意識 旧藩社会

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の研究上の背景は、近年、地域史研究の領域で、20世紀転換期に地域の歴史意識が質的に転換したとする分析が相次いで発表されていることがある。一方で、それらの研究はいまだ特定地域を対象とする事例研究にとどまっており、その転換が全国一斉に発生した構造的メカニズムは解明されていない。ここに、本研究で検討すべき課題が見出された。

2. 研究の目的

上記の課題を踏まえ、本研究はこの転換の背景に歴史研究者ネットワークの形成が関係しているとの見通しのもと、その実態を多面的に検討することで、近代歴史学の発達と社会への浸透が日本社会に歴史意識の転換をもたらすプロセスを構造的かつ具体的に解明することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、1899年に帝大出身の若手研究者を中心に設立された日本歴史地理学会の結成の前提と活動実態を主な検討対象とし、それを通じて、全国的な歴史研究者ネットワークの形成過程と、その交流の内実を解明することを試みた。具体的には日本歴史地理学会の機関誌である雑誌『歴史地理』と、1890年代に全国各地で結成された「地方史学会」の会報を基幹史料として、各団体の構成、会員の履歴、研究内容等を質的側面と量的側面の両面から検討した。

4. 研究成果

1890年代、仙台の第二高等学校、金沢の第四高等学校、熊本の第五高等学校の関係者を中心に「地方史学会」が結成された。本研究では「地方史学会」の会報、『史学雑誌』『歴史地理』等専門誌の分析を通じて、「地方史学会」の構成や活動実態を分析し、それが1900年以降に日本歴史地理学会を基盤に成立する全国的歴史研究者ネットワークの起源となっていることを突きとめた。

「地方史学会」は、帝国大学で近代歴史学を修めた高等学校の教員と、高等学校生を中核としつつ、地域に土着していた旧藩士ら、近世以来の知識人層を地域史研究や史料収集の協力者に擁していた。ただし、「地方史学会」は、どの地域においても、教員の転任や生徒の卒業によって中核的メンバーを失い、短期間で活動を停止する。しかし、転任した教員は、新たな任地で再び歴史研究団体を立ち上げ、生徒たちの中から帝国大学進学後、日本歴史地理学会の創設メンバーとなる研究者たちが輩出した。これら「中央」と「地方」で結成された諸団体を結節点として20世紀初頭、全国的な歴史研究者ネットワークが形成されていった。この経緯を実証したのは本研究の成果の一つである。

上記で論証した全国的歴史研究者ネットワークの形成過程で、かつて「地方史学会」の活動に協力していた旧藩関係者ら地域の知識層は脱落してしまい、日本歴史地理学会を中心とするネットワークは、大学の研究者と初等・中等教育の教員層に特化した構成となっていった。このネットワークの全国化にともなう質的变化を実証したことも本研究の成果である。

構成員の中に多くの初等・中等教員を含むこの歴史研究者ネットワークの中では、研究内容においても、現代史や歴史教育など、アカデミズム史学の研究者たちが扱わない課題が多く取り組まれることになった。そのような活動の中から、喜田貞吉『国史の研究』のような、アカデミズム史学の研究者による歴史教育論も登場することになる。このように、本研究では研究者と教員という異なる属性が協同するネットワークの媒介性が、研究内容においても媒介的な業績を生み出したことを論証した。

このような歴史研究者ネットワークを基盤とする日本歴史地理学会からは、史学会など、それ以前の学会とは異なる、独自の研究潮流が現れた。その独自性を代表する存在が吉田東伍である。正系の歴史教育を受けることなく早稲田大学教授となった吉田は、経歴の上からも「中央」と「地方」、「近世」と「近代」を媒介する存在であったが、その研究は、住民にとっての実用性を重視した歴史地理的手法を特徴としており、ナショナル・ヒストリーの構築に傾くアカデミズム史学とは内容において一線を画した。このように吉田東伍の歴史研究に新たな史学史的評価を与えたことは本研究の成果といえる。

上記のように、日本歴史地理学会は「中央」の学会でありながら、全国各地の歴史研究団体の結節点となり、大学の研究者と全国各地の教育者をつなぎあわせることで、全国的歴史研究者ネットワークを成立せしめた。しかし、このような異なる属性の会員と、雑多な研究志向を包摂する日本歴史地理学会の媒介的性格は、結果として学術団体としての同会の学問的特徴を曖昧化させることになった。1910年代以降、民俗学や考古学、人類学など隣接諸学が成長して専門分

化が進み、学会の組織化も進められる過程で、歴史研究者ネットワークの結節点としての日本歴史地理学会の求心力は低下することになった。このような歴史研究者ネットワークの質的転換と、その要因を分析したことも本研究の成果である。

この ～ に要約した成果を通じて、本研究では、20 世紀転換期に地域の歴史意識を転換せしめた要因を解明するという、当初の目的を達成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 廣木尚	4. 巻 53
2. 論文標題 日本歴史地理学会と吉田東伍 下	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学史記要	6. 最初と最後の頁 29 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣木尚	4. 巻 52
2. 論文標題 日本歴史地理学会と吉田東伍 上	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学史記要	6. 最初と最後の頁 29 - 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣木尚	4. 巻 878
2. 論文標題 1890年代における「地方史学会」の組織と活動	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 68 - 81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 廣木尚
2. 発表標題 1890年代における「地方史学会」の組織と活動
3. 学会等名 歴史科学協議会第56回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 廣木尚	4. 発行年 2022年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 アカデミズム史学の危機と復権	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------